

三月二三日、上杉朝興は越後の長尾為景に援軍を求めた。が、既に氏綱がこの盟約の先手を打っていた。

「このままでは関東名家の名折れぞ」

長尾為景の拒絶に発憤した上杉朝興は、自ら北条勢に立ち向かう姿勢を示した。

その直後、上杉家は不運に見舞われた。三月二五日、山内上杉憲房が病死したのである。

「この後継者を急ぎ立てる必要やあり」

山内上杉家宰・惣社長尾尾張守頭方は憲房の後継者候補を挙げ、家老の寄合にて議論を行った。

後継者と黙されるのは、この二名である。

上杉四郎憲寛。幼名・賢寿王丸、初名を晴直といい、古河公方・足利高基の次男にあたる。

つまり足利の血を引く養子という訳だ。

もうひとり、憲房の実子・上杉五郎。まだ元服前の少年である。

この二名の何れにするか、感情と現実が綱い交ぜとなり、沙汰は容易に定まらなかった。

現実的に考えれば、年長の者を立てるべきである。いまは軍事行動を予定しており、上杉分家にも与力を求めている。そうなれば、上杉憲寛とせざるを得ない。

「しかし、御実子を差し置くのは、どうしたものか」

長尾頭方の懸念も頷ける。

結局、現実を重視した後継者として、上杉憲寛が宗家を相続した。

その直後から、待っていたように、古河公方家からの干渉が始まった。憲寛にとつて足利高基は実父である、無視することは出来ない。

結果、上杉家は古河公方に協調する方針に転換する。

足利高基は嫡子の室に北条氏綱の娘を迎えている。そのうえで上杉宗家を組み入れた。

この理屈でいえば、「足利―上杉―北条」が縁戚で連なる。

当然、小弓公方は敵対する相手だ。

しかし、このとき扇谷上杉朝興は、反北条の

姿勢を取っていた。江戸城の一件が長く尾を引いていることとなる。

無理のない話だ。

当然、反北条の盟主は、小弓公方・足利義明ということになる。

が、和睦を為した以上、宗家である山内上杉家から

「小弓公方など、断固認めぬものなり」

と叱責されれば、扇谷上杉朝興も従わずにいられない立場にあった。にも関わらず、扇谷上杉朝興は、気儘に小弓公方や真里谷氏との緊密な連携を結んでいた。

「分家の分際でありながら」

と罵られながらも、主家である関東管領山内上杉家に対し、公然と蔑ろにする態度に転じたことを責める者は、存外少ない。

先に宗旨を変えた山内上杉家にこそ、問題があった。この問題は、後継者の選定より間もなく、大きな火種として、上杉家を炎上させた。

先代・憲房には実子・五郎がいた。

あくまで幼少を理由に、家督を憲寛に譲ったのだ。上杉家の累代家臣にとつて、先代の血を引く後継者が望ましいのは、云わずがものだろう。

「四郎公はあくまで陣代に他ならず」

家臣団は何事において、そのような声を荒げる。五郎が長じたあかつきには家督を返上することを約束せよと、憲寛に迫るのだ。

無論、上杉憲寛にその気はない。この問題を巡り、山内上杉家中は混乱した。

そうこうしている間に、ひとつの事件が生じた。

惣社長尾頭方が北条へ気脈を通じ謀叛を起したのである。調略に惑わされたといえればそれまでだが、すべては主家の不甲斐なさが生んだ離反劇といえよう。

そもそも惣社長尾氏は山内上杉家宰の家柄である。しかし、養子当主・憲寛はこの慣習を破り、家宰職を足利長尾但馬守景長に与えた。

「後継者の評定において、尾張守（長尾頭方）

は五郎を推した。故にすげ替えるのだ」

そういう理屈の沙汰は、感情論である。頭方はこれを恨んだのだ。

この鎮庄を行ったのは、従兄にあたる高津長尾平五左衛門頭景である。早期武力による平定が功を奏し、頭方は降伏した。以後、惣社長尾氏は頭景が継いだ。

このような混乱が生じれば、扇谷上杉家にとつても建前の和を立てて山内上杉家に従う意味などない。

扇谷上杉朝興は奪われた岩附を回復するため、独断で北条氏綱への敵意を露わにした。その一手が、蕨城攻めだ。

「蕨へ出陣し、渋川を討つべし。真里谷にも援軍を要請せよ」

扇谷上杉朝興はそう号令した。

近隣の反北条勢力にある豪族たちも、それに呼応する動きをみせた。軍勢はみるみると膨れあがった。

八月。

新座郡白子で北条勢を打ち破ると、上杉朝興は得意げに真里谷信保へと使者を送った。北条氏綱を打倒するための同盟を呼びかけたのである。〈足利―上杉―北条―〉という連携に対して、協調する数は余りあって困ることはない。

が。

「当家は房総管領なり。小弓の公方様抜きで独断はできません。よって、これより御判断を仰がねばなりませんまい」

真里谷信保はそのように勿体をつけた。

しかし、それは体裁に過ぎない。

真里谷信保が仮想する敵は、北条氏綱である。扇谷上杉家と同盟を結ぶことに、異存などない。それを敢えて焦らすのも、偏に小弓公方の副帥として上杉氏が台頭することを牽制していただけに過ぎない。己の立場を相手に誇示することは、大切なことであった。

数日間、真里谷城の客間に留め置かれたのちに、上杉家の使者は小弓城へと案内された。そこで使者は、足利義明に謁見した。

「上杉氏と足利氏の魚水の交わり、決して忘れたわけではない。さりとて上杉氏は古河公方を抱くものなれば、いかに信任をすればよいものかのう」

その言葉に、使者はすかさず扇谷上杉朝興の書簡を差し出した。義明は一瞥し、上目遣いに使者を見ながら口元を歪めた。

「我がもとで励むことで、ゆくゆくは山内上杉家から関東管領職を扇谷のものとする。狡猾なものよな」

傍らの真里谷信保へと義明は目配せした。

十十十

新たなる敵(2)

夢酔 藤山